

## ニューカレドニア日食 (1984年)

秦 茂

### 日食の概況と旅行計画

11月22/23日の皆既日食はインドネシアとは赤道を隔てて北にあるハルマヘラ島の付近で始まり、バブア・ニューギニアで今年の皆既帯とはかなり接近したコースを通して南太平洋を東に進み日付変更線を超えて南アメリカの西海岸沖合いで終わる日食です。南太平洋上に観測候補地となる島が見つからないとなると、陸上観測のためには昨年と同じ様にポートモレスビーを基点としたニューギニアが最適ということになりそうです。1983年のインドネシア、ニューギニア日食は日本からの参加者は1000人に迫ると言われたし、マスコミも大膽な取り上げ様だったけれど今回の日食はきわめてひっそりで行われた。日本からのプロの参加もなかった。陸上組としては木村 精二さん、大越 治さん達の企画でポートモレスビーからバスで3時間程のフラで26名が快晴のもとで観測に成功している。

1984年日食一ヶ月前の時点まではニューギニア隊自主グループの計画については世話人として当時三鷹に住んでいた私が担当していたので数人の方々から参加の申し込みを受け取っているのに、世話人の私が参加しなかったことで不審に思われた方もおられたことと思い、1年後の今、日食情報を通じてお詫び申し上げます。この年の2月1日付の某旅行社のパンフレットでは11月21日にサンディア일랜드島に着いて22日予備観測、23日サンディア일랜드で皆既日食観測となっている。また日食情報1984年No.2(6月17日発行)の中で木村精二さんが”11月皆既日食帯への旅”の冒頭でアメリカ海軍天文台サーキュラーNo.168には「現在サンディア일랜드は存在していない」との紹介があった。この様な混乱を解決するためにニューカレドニア島沖合い600キロメートルにあるサンディア일랜드(砂の島)に上陸出来るかどうかの調査が6月に行われた。その結果、この島は潮汐作用で時に海面上に現れることもある程度であることが分かり、サンディア일랜드上陸は断念せざるを得なくなった。代わってヌメア沖での海上観測の企画が浮上してきたのである。船上観測が可能な船舶3隻を調べた上で、最も可能性の高い船モアナ2世号1000トンが借りられる見込みがあった、1000トンあれば何とか観測出来そうである。実は船上からのコロナ観測は私に取って初めての経験だった。企画によると4日間続けて船中泊となっていて船酔の懸念のある参加者にとっては4日間の船上生活は耐えがたいものになりそうである。出発までにこの予定だけは変更させようと考えて、交渉の決果、企画は日食前夜だけの船中泊に変更された。

この様な経緯で”天国にいちばん近い島”ニューカレドニア日食のツアーに日本から参加し

た49名はJALのチャーター便で11月19日に羽田を出発して、翌20日早朝ヌメアのトンツータ国際空港に到着した。

### 三つの不安

天候についての不安は日食行のことだから、いつでもつきまとうが特にニューカレドニア到着の20日は梅雨時を思わせる雨空の中を水族館、マーケットの見学のあとでヌメア市内のホテルに入ったが、その翌日も雨は続いていた。やっと不安が取り除かれたのは日食前夜の星空だった。東から西にシリウス、カノーブス、アケルナー、そしてフォーマルハウトの順に明るい星が殆ど一列にならび、カノーブスの南に大マゼラン、アケルナーの南に小マゼランが見えていた。

第二の心配は、JTBのバンフレットでは海上観測に使う船は、フランス船籍モアナ2号（約1000トン）となっていたのに、直前の説明会では使える船はキャップ・デ・バン（350トン）に変更されていた。外洋に出たらピッチング、ローリングで三脚を甲板の上に置くことも出来ないのではないか。

こんな小さな船で、という不平は日食前夜船に乗り込む時に若い人の中で聞こえていたのだが、実際はこの船が出航出来るかどうかの不安があったのである。それが第三の不安なのである。私達一行が現地に入る前後に、この島では重要な選挙が行なわれていた。選挙は二つの派閥の、ニューカレドニアをそのままフランス領にして置く組と、独立を目指す組との激しい抗争だった。結果はフランス領派の勝利に終わったのだが、その直後に反対派が暴動を始めたのである。新聞紙上にも、民衆を鎮圧する装甲車、ヘルメット姿の軍隊などの写真が載り始めた。日食の二日前には、私達を日食中心線に運ぶ予定の貨物船、キャップ・デ・バンが暴動に巻き込まれるのを恐れて港を離れているとの電話が入った。この様な状況のまま日食の前夜を迎えてしまったのである。

22日の夜、港に停泊しているキャップ・デ・バンを見たときは船が小さいことへの不満など、どこかに吹き飛んでしまっていた。何とか日食中心線にたどりつけそうだ。

### 日食前夜、日食当日

日食の前夜、キャップ・デ・バン号は港に入っていた。乗船したのは日本からの49名の他に、フランス人11名、アメリカ・カナダからの参加31名（NASAの募集によるツアー）を主とする計95名の見物客、観測者で、割り当てられた狭い船室はいっぱいになった。何人かは船室を嫌ってシュラフ持参で甲板に出ていったが、これは大成功だった。南天のスターウオッチングが素晴らしかったのである。そのまま明日の日食を夢見ながら寝込んでしまった何組かもあったそうである。

観測船の大きさがノートにメモしてあったので書きうって置く、如何に小さい船だったか

御理解いただけと思う。船名 (CAP de Pine)

350トン 45m×7m 速度12ノット 船室 畳45枚分の広さ。

大小マゼラン雲は明日の晴天を予約している様に輝いていたけれども、何とも寝苦しい一夜だった。あまり眠っていなかった様だ。ニューカレドニアは北西から南東にかけて細長い島で、日食中心線は島の西の近海を殆ど平行に走っていたから、観測地点にはすぐに到着する。23日5時5分近く日の出を迎える。快晴である。クロワッサンとコーヒーの朝食を済ませて上甲板に上がると、船はエンジンをかけたまま停止している様子である。

どこまでも、きれいなオーストラリア、ニューカレドニア間の海域に沈没船を見かけた。朽ちた船籍表示板に徳宝丸 342トン 兵庫・神戸の字が読み取れる。

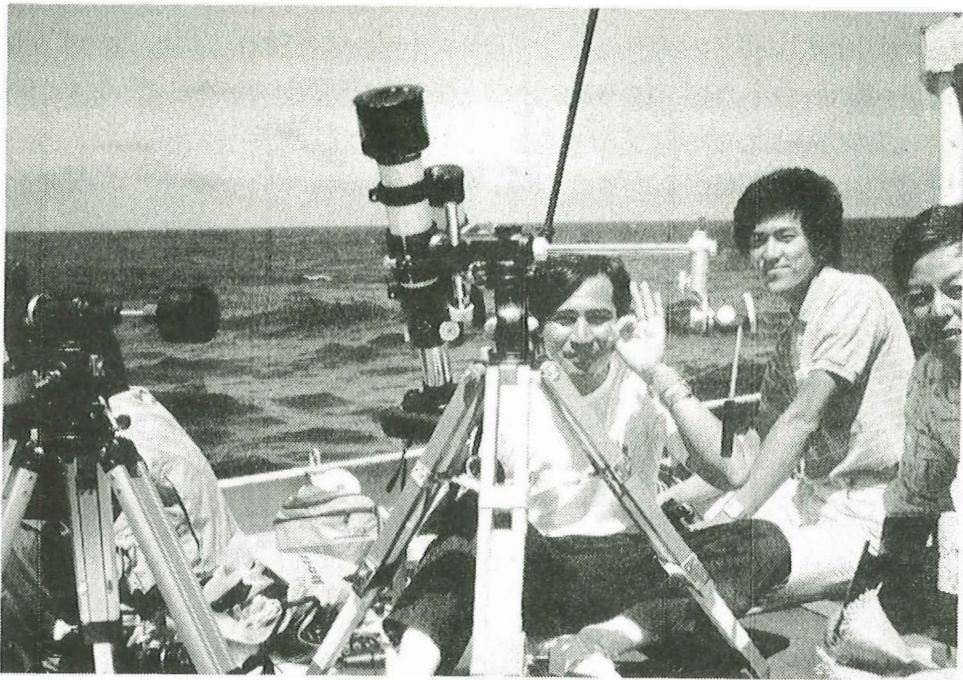
船側からの通告によると観測点は経度164°57.2' 緯度22°52.1' Sである。第二接触の時刻が近付くと、エンジンの音も消えた。海の色は暖かな青から濃いインクを流したような黴しい色に移り変わって行く。突然どこから涌いたのか太陽を雲がよぎっていったが、その雲はすぐに消えて、全くの快晴の中の日食だった。甲板上には淡いシャドウバンドがやっと見える程度に流れ、数秒後にはダイヤモンドリングがはっきりと姿を現わして、録音テープによると1分34秒の皆既が、これに続く。極小期のコロナに見られる赤道方向のストリーマーが広がっているがどうしたことか東側のストリーマーは切断された様に消耗していて、これを包み込む様に更に三本のストリーマーが黒い太陽から伸びていた。この日食に続く太陽黒点の極小期はまだこの時点では分かっていなかったが1986年9月で(国立天文台編 理科年表1995年による)コロナの形は二年後の赤道方向に紡錘状に広がった端正な極小型コロナへの過渡期とでも考えたら良いだろうか。

私は甲板上に横たわって94秒間じっとコロナを見つめていた。南北方向のボーラープリュームは極小期のそれであった。ダイヤモンドリングに彩どられた一瞬、たちまち復元して行く太陽、それは何時もの日食と同じに夢から醒めて行く一時である。静まりかえった船内は賑やかさを取り戻して行った。

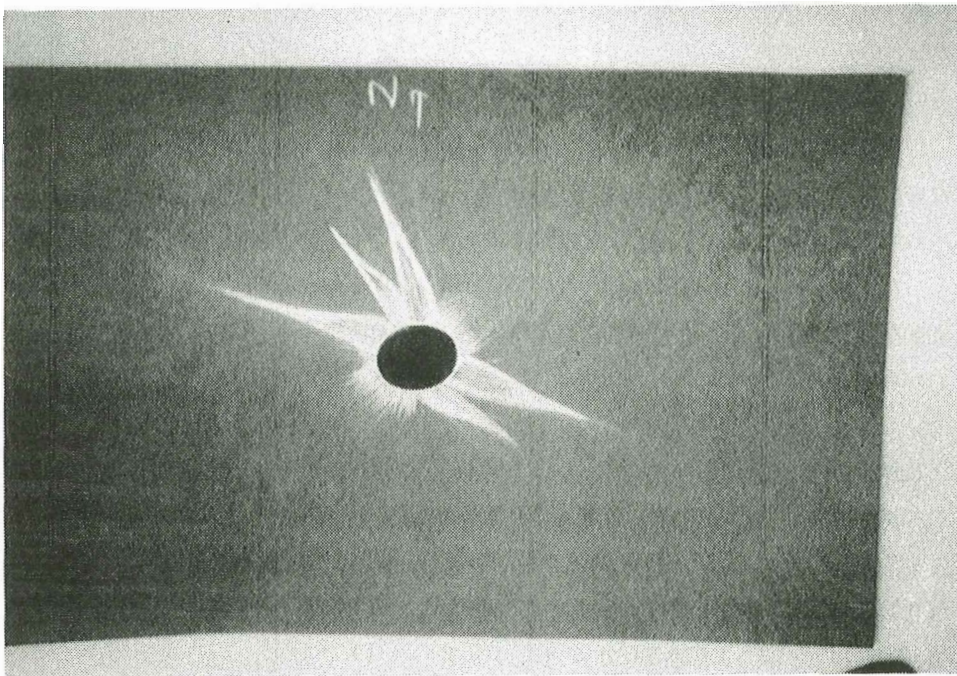
上甲板に椅子を持ちだして、うっとりしていたフランスの老婦人に挨拶すると「仕事を離れてから日食を見る事を生きがいにして来ました。今度で十三回目です」と言われる。私は天文台退職以来、2度目の日食行である。

### 1995日食計画

今年10月24日の南アジア日食では各旅行社がインドからボルネオ北端にかけてのツアーを計画されているが、皆既継続時間の最大はベトナムとボルネオ島の間の海域で、ここでは130秒の皆既が見られる。1994年の南米日食計画で某旅行社とコンタクトした時、次の日食はホーチミンから大型船舶を出して日食中心線をボルネオ北端に向けて走らせる案はどうか、と申し入れてあったがどうやらこの案は採用されなかった様である。尤も船上観測の利点は了



船上観測



コロナのスケッチ（吉橋淑子さんによる）

解された様で、このプランは他の旅行社には持ち込まないと釘をさされた。今の所、国内では船上観測のプランはない様であるが、希望される方は是非国外のツアーに申し込まれ豪華船での日食の旅を楽しんで来て下さい。

南アジアの旅行一般について思い付くことが幾つかあるが、特にインドなどでは観光ずれしでいて、何処から集まるのか旅行者が民衆に囲まれて迷惑するケースもあると聞いている。三脚が倒されても困るので観測地は公共の敷地、或はホテルの屋上を選ばれるといい。これはベトナムから帰って来た友人の話だが、100米ドルを一気に現地のお金に換金してしまうとベトナムでは物価が安いこともあって余った現地のお金をもう一度ドルに替えるのが面倒だという事情があり、銀行ではいやがるかも知れないが10ドルを10枚、出来ることなら1ドルを100枚持って行って少しずつ現地のお金に換金する様に勧められた。

船上観測

の反省

翌年の4月1日に森 友和さん、斎藤 敏さん、鷲見 敏郎さんによる「ニューカレドニア日食観測隊報告書」が発行されているが、今後の船上観測に役立つかもしれない反省、苦情が盛り込まれているので二、三を紹介して置く。

1/500秒などといったシャッタースピードの速い露出については関係ないが、例えば外部コロナのための1/60秒よりも遅い露出では黒い太陽がレモンの様に楕円形になり、写真としては失敗作だった。ピントのあまい作品が多かった。カメラぶれが気になるなどの記述がある。

船の揺れがひどいので、太陽をカメラファインダーの中心に持ってくるのが大変だった。しかしこの方が皆既に入ってファインダー内の太陽の動きが不思議に小さくなった、と書き加えていた。

誰かの三脚が突然の揺れでヒックリかえった。自分のは手でしっかりと押さえていないと危ない。

政情不安などのため1000トンの船が350トンに取り替えられてしまったという事情があったにしても、こんな小さい船で外洋で望遠鏡を操作するのは大変なことだ。もっと大きい船舶を準備すべきだし、小さい船だったらスケッチか双眼鏡による観望に切り替えること。これが今回の反省である。

### 観測ツアーの日程

一週間のツアーであったが、比較的ゆとりがあった。以下はその日程である。

11月19日	16時05分	羽田発	JL369
	16時50分	大阪発	JL319
	19時10分	福岡発	JL1779

11月20日	07時30分	ヌメア着	
		ヌメア市内および水族館観光	
11月21日	終日：自由行動		
11月22日	22時00分		
	チャーター船にて観測地に向け出発		
11月23日	日食観測		
	22時00分	ヌメア着	
11月24日	23時45分	ヌメア発	JL1770
	グアム経由 帰国の途へ		
11月25日	09時00分	福岡着	
	09時55分	福岡発	JL306
	10時55分	大阪着	
	11時40分	大阪発	JL358
	13時10分	羽田着	

船中泊は2日夜のみ、利用ホテルはヌメア市内のモカンボ・ホテル  
 JLは日本航空の略記である。

#### ニューカレドニアの観光

この島は新婚旅行のメッカだと言われているが、私達のツアーには9組の新婚さんが含まれていた。日食を意識して結婚の日取りを決めたのではと疑がいたくなる様な編成だった。ついでに新婚の奥さんが揃って日食初参加と言うのも面白かった。日食好きの旦那さんの引力なのか、結婚後も日食は続けるぞという意志表明なのであろうか。

比較的ゆとりのあったこのツアーで私達が見て歩いたニューカレドニアの素晴らしさの幾つかをお伝えしよう。

#### ・ヌメアの街

ニューカレドニアは人口14万、日本の四国位の大きさの島で、ヨーロッパ系の人は50%を超えています。入国の際には検疫、空港税も不要です。ホテルでのチップも不要でした。ヌ

メアまでは空港からのタクシーで1時間もかかりません。ヌメアはニューカレドニアでは最大の街です。プチ・バリと呼ばれていますが、バリよりは美しい町並みです、玩具の街といった印象でした。私はこの年の2月にフランスのバリーに滞在していたけれども、ヌメアと比べてずっとくすんでいた。もちろんヌメアの街にはルーブル博物館とかソルボンヌ大学、凱旋門のような歴史はないけれども、ココティエ広場でも広場に続くマーケットでも本当にフランス風だった。違っていたのは美しい海の色と街外れのモゼル湾に見えていたヨットハーバーだった。色とりどりの帆が海的美しさを引き立てていた。

中心街には幾つかの高層ビルがあるけれども、例えば東京の新宿で見られる様な高層ビルはなく、街は白壁や赤壁の玩具の国を思わせるつくりになっています。丘に登って見おろすと青や緑の屋根と壁のコントラストがまた見事です。中央にあるココティエ広場、それに続く免税店、ブティック、スナックの立ち並んだマーケットなど何度も歩いて見たくなるプチ・バリです。

雨さえなければ水族館観光も市内見物ももっと楽しかったに違いない。

#### ・水族館・植物園

ヌメアの中心街から車で15分ほどの水族館に行ったのは、日食の3日前のことで生きた化石と言われるノーチラスやさまざまな形のサンゴ、海亀が私達を不思議な世界に誘ってくれます。ニューカレドニアの海底を切り取って水槽に置いた様だと良く言われますが、一見の価値がある水族館です。

植物園は南太平洋の花と植物が集められていて、その奥にある野鳥園では国鳥とされているカグーが見られます。鶏くらいの大きさですが、なかなか気品のある鳥でした。

#### ・イルデバン・アメデ燈台

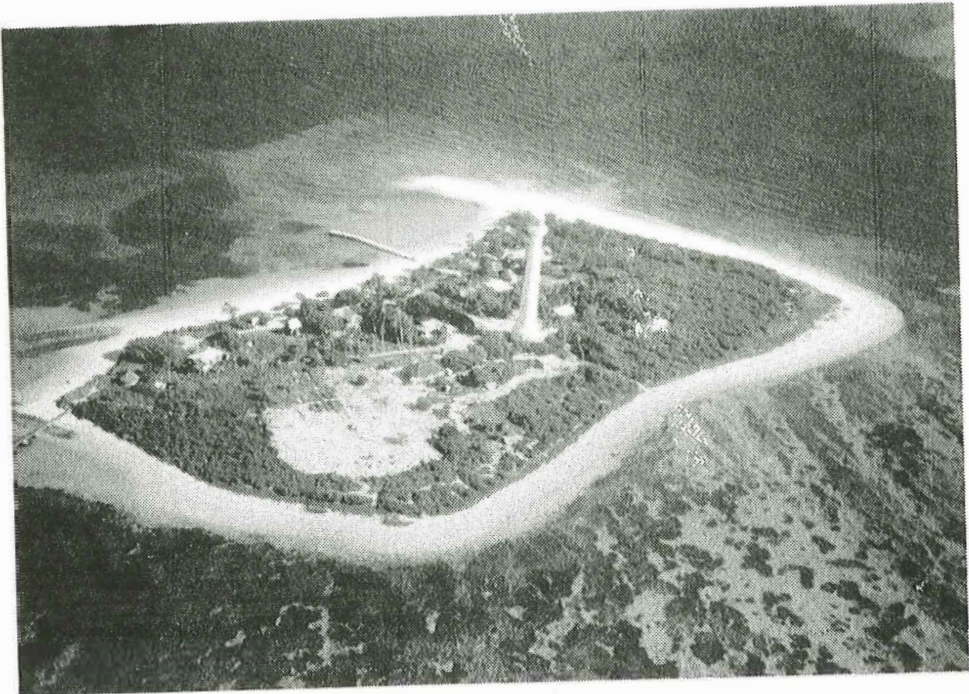
イルデバンへはセスナ機で30分くらいで行けます。松の島と言うそうで、日本の松島と姉妹都市になっているとは、島に来て初めて知ったことです。

アメデ燈台には船で1時間半で行かれます。この海ではウインドサーフィンを楽しむことも出来るし、グラス・ボトム・ボートで海底（水族館とはひと味違います）を見物したり出来ます。ニューカレドニアの浜辺は何処に行ってもサンゴ礁独特の雪の様なまっ白な砂で覆われています。

今回はここまで足を伸ばす機会がなかったけれど、島の北端にある無人島はヨーロッパの人達の間ではヌーディストの島として有名だそうです。



ヌメアの子供達



アメデ燈台